

(1)

町内の民生委員が、今年から男性に変わった。その少し前から、私は週二回、町内の集会所の「百歳体操」に通っている。すすめられた時、「百歳まで生きようと思っていないから」と、憎まれ口をきいた。だが今は毎週、会場まで五分歩いて行く。歩けなくなったら、自分も猫も困るから。

民生委員さんは会場の外に立って、誰々さん御苦労さんと声をかける。としよりがまごついていると、すばやくスリッパを揃える。高齢者は気がつくとも三十人を越した。

四月半ばにその人が訪ねてきた。一人暮らしのとしよりへの目配りも仕事の一部なんだろう。中肉中背のにこにこした人だ。ちょうど頂きものの羊かんがあり、外出の予定もなかったから、散らかっているリビングに、どうぞと言った。名前も家がどこかもまだ知らない人だけれど。白いシャツに紺のネクタイをきちんとしていた。夫婦二人暮らしかな、孫達と一緒にかな？ お茶をいれながら私は、日頃思っていることを尋ねた。

「先生をなさってたんですか」

彼はびっくりした顔になった。

「おれが先生だったわけ、ないべした」

言われてみれば、彼のしゃべり方は、先生のそれではない。普通のお勤めだったのかも。

集会所の黒板に、彼は毎週大きい読みやすい字で、連絡や注意事項を書いておく。見るたびに私は、うまいなあと感心し、昔の小学校の先生のチョークの板書を思い出す。

戦前の師範学校は、先生の卵達にもう一つの教育でいまましい教育勅語をたたきこんだ。教師の板書は、つねに子供の手本となる正しい見栄えのするものでなければならなかった。思えばどの先生もお手本と同じかきつとした字を書いていた。もちろんこの民生委員Sさんは、戦後生まれにきまつている。それを話すと、しばらく考えて彼は言った。

「おれの字はほんとに下手なんだ。ただこのところ、九十歳以上の人が三人くるよな。おれのしゃべることが一つも聞こえないって言わってしまった。それで連絡は、見える字で書くことにしたんだ」

「耳の遠いとしよりって、わりと眼は見えるよね。私もそっちの方だと思う」

「一回書いたら、うしろに行行って見直すんだ。また全部書き直したりしてんのよ」

そこまで一生懸命の字だったんだ。そして、も一つびっくりすることを彼は言い出した。ずっと独身で七年前に九十歳でなくなった母親と二人で暮らしてきた。女のきょうだいはいららしいが。

「お父さんがいなかったのね」

「いるにはいたが悪い親父でさー。おふくろはうんと苦労したんだ」

「働かない人だったのかな」

「それもある。おれも田舎で高校までは行ったが、新聞配達やら何やらで働いてばかりいたから、教室ではいつだって落ちこぼれていたんだっけ」

「ただ唄の大好きなおふくろで、年じゅう唄ってる人だった。貧乏だけでもおかげで、家は暗くなかった。おれも歌だけは得意でさー。音楽は小学校からずーっと、5⁵ だったよ」

彼はにっこりした。良い話だ。

「民生委員の任期は三年だから、二期やっとな六年だ。そのあいだにおぼえたこと生かして貧しい子供をサポートする仕事、できつといいと思ってる所でね。おれ貧乏はよく知ってたから」

「そうなんだー」

母を見送ったあと、彼は少年時代からやりたくてもできなかったことを、とうとうし始めた。毎朝NHKの基礎英語を聞く、ヴォランティアに出かける、クラシックギターの教室にも通って七年目だ。もつともこの半年は練習し過ぎで肩をいたため休んでいる。でももうじき再開する。

「あれえ、Sさんギターやってるんだ」

「うん、音楽好きだもの」

いつの間にか友達みたいなやりとりになっていた。思いついて古いアップライトピアノの上におきつ放しの「日本抒情名曲集Ⅱ」を彼に渡した。この人はきつとカラオケや飲み会で歌ってきたにちがいない。本の中の二百曲の半分も私は知らないが、まあ「どれか歌ってみますか」ときいた。良い歌ばかりだ、と感心していた彼は「見上げてごらん夜の星を」と言った。私にも聞きおぼえがある、演歌というより抒情歌なんだろう、伴奏も弾きやすい。七十歳相応に少しくたびれているけれど、驚いたことに、かなり良い声で音程も確かである。十年も前に調律しただけ、私も長年伴奏なんかしたこともないのだが。

「ピアノの音って、なんてすばらしいんだ」

彼は感に堪えている。たぶん生まれてはじめてすぐ傍でピアノが鳴り、合わせて歌ったからだ。ギターの音は三オクターブだけなそうさ。ピアノは八十八鍵つまり十一オクターブ以上だから、それだけ表現も複雑で深くなるのかも。

「今度はギター持つてらっしゃい。合奏しよう。楽譜ないと私は弾けないけど」

まるで偉そうに私は言った。彼は嬉しそうに帰って行った。

(2)

五歳からほぼ十年、ピアノをけいこしたとひよつと話すと、事情を知らない人は、良いうちのお

嬢さんだったのかと意外な顔をする。とんでもない。そんなお嬢さんだったためしはない。

明治維新後、西洋音楽は二つの道筋で日本に入ってきた。一つは官（文部省）↓東京音楽学校（現東京芸大）↓血の汗を流して励んだ若者エリート（ヨーロッパ留学。彼等が作ったメロディー中心の文部省唱歌。「花」「荒城の月」を作曲した瀧廉太郎は代表者の一人であろう。もう一方のそれはキリスト教会の和音が支える宗教音楽による学習だった。「からたちの花」「この道」「赤とんぼ」など数々の名曲を残した山田耕筈は牧師の息子であり、島崎藤村の詩「椰子の実」の作曲者大中寅二は、東京霊南坂教会のオルガニストだった。

当然のこととして幼い私にピアノを習わせた父もプロテスタントの牧師だった。父母の夢は娘が礼拝堂でオルガンを弾く姿にあったかもしれない。たしかに昭和十年代のピアノ友達はみな信者の家庭の子弟だった。ピアノは好きでも嫌いでもなく、特にうまい子供でもなかったけれど、私は毎週レッスンに通った。だが、親の夢は永遠に果たされなかった。

女学校三年生、十四歳、敗戦直前の一九四五年七月、アメリカによる都市の無差別爆撃で、父の教会堂も家族の住居も一晩で燃え落ち、父も母も焼け死んだ。

一人生き残った一文無しの私を、伯母（母の姉）が養ってくれることになった。伯母は私の女学校の音楽教師で、幼い私にピアノの手ほどきもしてくれた人である。彼女が住んでいた借家の家主一家も焼け出され、立ち退きを求められたところだった。仙台市の半分以上が焼き払われたさなか引越す先などありはしない。五部屋の一軒家を家主の六人家族と伯母と私が分け合って暮らすことになった。

明日の食べ物求めて焼け残った仙台駅に人々は殺到した。勤めが終ると伯母もそこにまじった。給料だけでは二人の暮らしをまかない切れなくて、伯母は夜は出げいこ、土・日・祭日は一日じゅう子供達にピアノを教えていた。幼い時から私のピアノの先生だった伯母は、今やその姪を養うためにピアノを見てくれる時間をなくしてしまった。学校勤め、食料探し、ピアノレッスンに明け暮れる伯母に私はろくに感謝もせず、また三度の馴れない炊事の日々をみじめとも思わぬ少女だった。

平和をとり戻した学校で、外国民謡や讃美歌を合唱する友達から離れ、伴奏の椅子に座るのは晴れがましく嬉しかった。全国の戦災孤児の中では、もっとも恵まれた少女の一人であったのはたしかである。

伯母はやさしい人だった。大学生になった私が男友達を連れてきたり、夜おそくまで歩き回ったりするようになるまで、叱られたり小言を言われたりした記憶はない。少女のつくる粗末な料理をいつもおいしいとこにこに食べてくれた。疲れてもいただろう。

だが十代はいつまでも続きはしない。他にしたいこと、することが山ほどふえてくる。凶体の大

きい楽器とのつきあいは徐々に薄れ、大学を卒えて仙台を離れた後は完全に切れた。恐るべきことに、断絶は八十歳を越すまで続く。えらんだ人生の成り行きだった。

私が結婚した大正生まれの夫はクラシック音楽をとっても愛した人で、若い時はとりわけバッハに傾倒していた。子供三人が育つ時、家の中は大い父親の聴くLPの音楽が流れていた。音大に入りはしなかったが、三人はきわめて自然にピアノを弾きはじめ、音楽になじんだ。一方の私は自分のしたいことを最優先し、大して子供をかまわない母親だった。時がきて三人は家を出て行った。いつそう私は自由になった。

二〇〇一年に夫がなくなった。そして二〇一三年初夏の朝、病気で十年間母親と猫と暮らし、ようやく快方に向かっていた長女が、急逝した。好き勝手な母親だったにせよ、夫と娘の不在は生きていく実感の根こそぎうばった。何も食べられない。眠るには大量の眠剤が要る。

葬送のあと、その夫とヨーロッパ西南の街に戻った、長女より十一歳若い次女は、空港で安着を知らせた後に言った。

「ママ、あなたは良いお母さんだったのよ」

そうは思わないけれど、あの時の娘の言葉を、幾度となく私は思った。

東京に住む息子とつれあいは、母親を案じて蒼白だった。これではとても生きることを止めるわけには行かない。

とつぜん六十年も音信不通だった女学校時代の本好き同士の親友から電話をもらった。彼女は敗戦の年の春、父親をなくし、女学校だけで就職した。珍しく鋭い眼をした美少女だった。焼け野原の時代にどこで見つけたのだったかドストエフスキーを回し読みし、『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』に登場する女性四人の誰が一番？ などとおしゃべりしたことを、どっちもすぐさま思い出した。文通と電話のやりとりが始まった。彼女は八歳若い男性と昔結婚し、彼の水産系の仕事のためスペインのカナリア島に十年住み、七つの海をめぐる、優秀な息子が二人いる。三年前に夫をなくした。ある時、私はぼやいた。「私って家の中のことも何もできないでしょ。不器用は救いが無い」。即座に彼女は言った。

「あなたピアノ弾けるじゃない。それで十分よ。今だってあなたの指の動き、おぼえてるもの」
頭をたたかれたようだった。本人が忘れてることを、おぼえてた人がいるなんて。

不意に私はかつてのモーツァルトやシューベルト、ベートーヴェンを聴きたいと思った。あと四年か五年後にはたぶん生きていない自分。楽譜が見えて、指が動いて歩ける時間はさらに少ないかも。ピアノが哀しみや悔恨を癒やすとは全く思わない。幼い長女を十分可愛がりもせず、苦しむ病気の娘を結局助けられなかった自分は癒やされたくもない。ただ「死と乙女」も「悲愴ソナタ」も

モーツァルトの「ロンド」も哀しみの曲だった。大作曲家達なのにどうしてあんなに悲しい歌ばかり書いたのだろうか。

おとしの秋だから一年半前だ。息子達はとても喜んで、物を置くだけになっていたアップライトから固定電話やぼろぼろの楽譜や本をどけ、埃を払った。

「いいことだよ、頭も全身も使うから」

と彼は言った。親は呆けないでもらいたいものね。

以来、私に余分の時間はなくなった。長女が散らかしたままの楽譜の中にはフォーレもドビュッシーもあるが、ショパンが五冊と多い。もちろん好きだったのだろう。中からせつせと選んだやさしいマズルカ三つとプレリユード三つ、シューベルトの即興曲を練習した。難しい曲は一ページで諦める。目下は戦乱の最後のころ弾いた悲愴ソナタを始めた。十四歳の自分と八十六歳の自分は別人みたいなのだけれども、初めての曲よりはましである。

(3)

五月連休の直前、息子とつれあいの友子ちゃんが帰ってきた。勤めが終った金曜の新幹線だから、着くのは九時過ぎ。翌朝はいつも通り友子ちゃんがコーヒー、ベーコンエッグ、サラダ、トーストを並べてくれる。レストランのランチより、はるかにおいしい。さつき晴れで空はどこまでも

青く、庭のニカ所で夫の育てた紅いつつじが、燃えたっている。花をおくほか何もしないけれど、長女の命日が近い。あと片付けも友子ちゃんがあるから、手すきの私はさつきとピアノの前に腰かける。悲愴ソナタ第三楽章の練習。ベートーヴェンの二十八歳の作曲とのこと。

戦乱時の最後、ピアノが灰になる数日前、これをさらっていた。古典派の端正はあるとしても、烈しい悲しみは伝わってくる。当時もベートーヴェンのピアニストとしてのウィーンでの名声は高かった。身体も丈夫で耳もよく聞こえていたはずである。それでも悲しく孤独だった。なんでかしらん。人の世にはいつでもどこでも悲しい人は山ほどいるのだろう。

隣の部屋で猫と遊んでいた息子が散歩か買い物に出て行くところだ。傍を通りながら声をかけてきた。

「グミグミは黒鍵ですよ」

「そうそう」

もう私の眼は記号がシャープかフラットか、音符が三線目の上か四線目の上か識別できない。だから適当に弾く。へんな音と思った瞬間、曲は次に進んでるから、そのまま進む。たしかに、黒鍵でした。

「河内さーん」

息子と入れ代りに声が出た。Sさんが約束通りギターの譜面の拡大コピーを三枚持って、立って

いた。六月の第一金曜にギターを持つてくることになった。

「頑張って練習してくっからね」

一枚目は「禁じられた遊び」、ギターだと「ロマンス」と言うらしい。二枚目、三枚目を見てぎよつとした。聴いたこともない「演歌」である。そもそも演歌というものを聴いたことがない。関心がなかった。機会も年に一度の町内敬老会を除いては。友子ちゃんを呼ぶ。彼女の父は演歌大好きと聞いたことがある。たぶんわかるだろう。譜面を見るだけの演歌のリズムは難しい。

「津軽のふるさと」は美空ひばりの唄。「潮来^{いたこ}花嫁さん」は花村菊江。ちよつと待つてねと言つて、友子ちゃんはスマホをとつてきた。彼女も唄えないんだ。ちよつとさわるとステージで「津軽のふるさと」を唄う美空ひばりが、続いて「潮来花嫁さん」を唄う着物の花村菊江という子がパツと現れた。呆れて私はすごいつと言つただけで声も出ない。なるほどこれでは世の中の人には知らないことなんか一つもなくなるはず。それを知らないでいる自分一人が恐ろしくこっけいだった。

Sさんが音楽好きと言つた時、私はそれを自分の好きな音楽と同じものと何となく思つたふしがある。でも、音楽の一語には演歌もジャズもビートルズもみな含まれていたのだ。言葉つて海みたい！

一方Sさんは、大好きな「津軽のふるさと」イコール美空ひばりの持ち唄や「潮来花嫁さん」なら私が知っていると思ひ込んだのかも。おかしい。私だけがおかしがつてるんだけれど。

「音楽にあるいは美空ひばりの唄に母と自分は支えられて生きてきた」とのSさんの言葉には真実があつた。ほんの少し手伝いができるのは悪くない。

しよつちゆうまちがえながら、あの日以来、一日三十分、私は三つの唄を練習する。まちがいは減つてきた。ただ「演歌」「美空ひばり」のどかが良いのか面白いのか、さっぱりわからない。いろいろ聴けばちがつてくるかもしれないけど。

「山形も暑いんでしょう。熱中症に気をつけて」

友ちゃんから電話がきた。

「演歌とベートーヴェン、ごちゃごちゃの毎日よ」と話すと、

「お母さん、ひとまわり大きくなるんじゃない」

彼女は笑つた。私も笑つた。Sさんのふるさと、私のふるさと、人にはそれぞれちがうふるさとがある。ない人もいる。

ふるさとを語るのは容易ではない。